

## 戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 (2)

——名古屋回教徒団とイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部の活動を中心に——

吉田 達矢

### はじめに

現在、名古屋市に在住しているムスリム(イスラーム教徒)の数は2000~3000人ほど<sup>1)</sup>と思われ、彼らに関する研究や調査も幾つか行われている<sup>2)</sup>。一方、戦前期の名古屋市にもムスリムが居住していたが、彼らの社会生活については殆ど知られていない。そこで、筆者は別稿にて、彼らの大多数を占めていたタタール人(旧ロシア領出身のムスリム)の人口推移や就業状況について検討した<sup>3)</sup>。それを踏まえて、本稿では、戦前期の名古屋においてタタール人たちによって結成された2つの団体、すなわち、名古屋回教徒団とイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部<sup>4)</sup>に関して、それぞれの設立経緯や活動とともに、奉天や日本各都市に存在していたタタール人コミュニティとの関係についても検討する。

### 1. 名古屋回教徒団

#### (1) 設立の経緯

大正12~14(1923~25)年頃より、名古屋にもタタール人が定着するようになったが<sup>5)</sup>、名古屋回教徒団が結成される以前に彼らがどのようにタタール人(あるいはムスリム)として一体の活動を行っていたのかは不明である。ただし、下記の史料にみられるように、昭和6(1931)年2月に例祭が開催されていたことから<sup>6)</sup>、名古屋回教徒団が設立される前より、彼らは定期的に集まっていたようである。

その名古屋回教徒団は昭和6(1931)年3月に設立された。設立の経緯は次のとおりである(以下、引用文中における[ ]は筆者による補足)。

名古屋市在留旧露西亜人回教徒 [=タタール人] ニ在リテハ本年 [=昭和6年] 二月例祭ヲ開催シタルガ其當時名古屋市ニ回教徒團設立議決セラシ名古屋市中區御器所町字小針居住洋服商旧露國人ムーラアフメートアラスラフバーヨリ東京市代々木町東京回教徒團本部ニ設立許可請願中ノ為本月 [=3月] 十九日別添規約 [2文字判読不能] 附越シタルト同時ニ名称役員氏名ヲモ指令シ来タレリ…… (後略)<sup>7)</sup>

以上のように、名古屋在住のタタール人たちは「東京回教徒團」(大正14(1925)年1月設立)<sup>8)</sup>を本部とする、いわば「支部」として名古屋回教徒団を設立した。それはつまり、当時の名古屋在住のタタール人の多くは東京在住のタタール人との結びつきが強く、さらにいえば、東京回教

徒団の中心人物ムハンマド・ガブドゥハイ・クルバンガリー（1889～1972）<sup>9)</sup>（以下、クルバンガリー）の影響下にあったといえる。実際、名古屋回教徒団が設立される直前の昭和6（1931）年1月7日には、東京市代々木<sup>10)</sup>に建設された「回教徒学校」（クルバンガリーが校長）の「新築落成祝賀會」への出席と年賀を兼ねて、名古屋市西区上島町三十五番地在住の羅紗行商人サイガレーフが妻カリマとともに上京している。ただし、サイガレーフは在名古屋タタール人の代表としてではなく、あくまで「個人」として出席した<sup>11)</sup>。

## (2) 団体の概要

団員数についての統計はないものの、当時の名古屋に住むタタール人（露國人）は、昭和6（1931）年では男28人、女22人、世帯数16であった<sup>12)</sup>。この数値から、おそらく団員数は40～50人程度であったと考えられる。次に、規約は以下のとおりであった<sup>13)</sup>。

一条 本團ノ目的ハ名古屋回教徒相互ノ親睦ヲ計ルニアリ

二条 本團ハ貧困ナル回教徒ノ援助ヲナス

三条 本團ノ費用ハ本團員ヨリノ毎月ノ寄附金ニヨル

四条 其ノ他一般ヨリノ寄附金ヲモ本團ノ費用ニ當ツ

五条 本團ハ毎年一回總會ヲ開ク

六条 管理人會ハ毎月二回開催ス

七条 毎週ノ金曜日及年二回ノ礼拝ト祈禱ヲサイドガリエフ<sup>14)</sup>氏ノ居宅ニ於テ執行ス

すなわち、名古屋回教徒団はタタール人だけの団体ではなく、ムスリムの親睦団体として結成された。ただし実際には、タタール人以外のムスリムが団体の活動に加わっていた様子はみられない。

設立時の役員は、団長：ムーラアフメート・アラスラフバー、会計：スデ・サイガレーフ、書記：デイレツシャー・シズカノーフであった<sup>15)</sup>。オスマノヴェの研究書では、それぞれをAhmed Arasul (ov), Husnutdin Said-Gali, Devletshah Sezganと表記している<sup>16)</sup>。また同書では、Mullah Ahmed Arslanという人名もみられるが、これもムーラアフメート・アラスラフバーのことであろう<sup>17)</sup>。なお、彼の名前の冒頭にある「ムーラ」は「モッラ (molla)」のことであり、それは一般的には「イスラーム知識人の尊称」とされ、「導師」と訳しうる<sup>18)</sup>。

## (3) 活動

後述するように、名古屋回教徒団は遅くとも昭和9（1934）年8月までには解消したため、この団体の活動期間は3年半以下と短く、その活動については不明な点が多い。僅かに昭和7（1932）年2月8日に開催された、以下のような会合が確認できる<sup>19)</sup>。

本月〔＝2月〕八日午前七時三十分名古屋市西区上島町十番地金物行商サツハワレーフ方ニ於テ「マホメット教僧侶「キリケーフ」司會ノ下ニ市内在住マホメット教徒（旧露國人）左記十二〔ママ〕名<sup>20)</sup>合シ本年最初ノマホメット教禮拜ヲ舉行シー同會シテ午前九時散會シタル……（後略）

ここにみられる「サツハワレーフ」は、オスマノヴェによれば、上記のHusnutdin Said-Galiである。

すなわち、前述の規約七条どおりに礼拝および会合は行われていたといえる。また「キリケーフ」とはフオーサエン・キリケーフ (Husain Kilki) のことであろう。彼は昭和14 (1939) 年に神戸に移るまで、イマーム (礼拝の指導者) などとして在名古屋タタール人コミュニティの中心人物のひとりであった<sup>21)</sup>。

このほか、昭和8 (1933) 年9月に「イスラム学校」が当時の西区北押切天神山に創立され、当初の児童数は僅か5名であった<sup>22)</sup>。当時の教育状況については不明であるが、前述の東京にあった「回教徒学校」に併設していた回教印刷所 (昭和6 (1931) 年設立) においてタタール語の教科書も印刷されて、各地のタタール人コミュニティに配布されたので<sup>23)</sup>、名古屋のイスラム学校においてもその教科書が使用されていた可能性は高い。

## 2. イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部

### (1) 設立の経緯

戦前期の在日タタール人コミュニティに関する文献の幾つかでは、イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部 (以下、名古屋支部) の設立日は昭和9 (1934) 年3月30日とされている<sup>24)</sup>。一方、『外事警察概況』第4巻では、「…… [名古屋支部は] 昭和九 [1934] 年一月、タタールモスクム文化協會東洋本部會長アヤズ・イスハキ [が] 回教大祭列席のために來名したる機会に於て結成せしめたるものなり」と記されている<sup>25)</sup>。このように名古屋支部の設立時期には2つの説があるが、いずれにせよ、昭和9 (1934) 年1~3月のあいだに設立されたのは間違いないと思われる。以下では、設立までの経緯を概観する。

名古屋支部設立の背景としては、アヤズ・イスハキー (1878~1954)<sup>26)</sup> (以下、イスハキー) の来日 (昭和8 (1933) 年10月) を契機とした、在日タタール人コミュニティの内部対立が関係している。すなわち、クルバンガリー派とイスハキー派の対立である。松長によれば、イスハキーの来日まで、東京など、在日タタール人コミュニティのあいだで影響力があったクルバンガリーはバシユキール出身であり、在日タタール人の多数を占めていたカザン・タタール人の支持を必ずしも得てはいなかった。また、クルバンガリーは性格的にはかなり強い個性の持ち主であったようで、実際にはイスハキーが来日するより前から、東京回教団内部にはクルバンガリーに反発する者が多かったようである<sup>27)</sup>。そして、昭和9 (1934) 年2月11日に発生した「和泉橋倶楽部乱闘事件」<sup>28)</sup> によって、クルバンガリー派とイスハキー派との対立は頂点に達し、在日タタール人コミュニティ内部に決定的な亀裂が生じた。

このような時、名古屋在住のタタール人たちはどのような動きをみせたのであろうか。外務省が作成した「在本邦回教徒「トルコ・タタール人」忿争問題」という報告書では、以下のような記述がみられる。

現在我國ニ在留スル回教徒「トルコ・タタール」人ノ信徒團體ハ三アリ第一ハ「クルバンガリー」ノ率キルモノ第二ハ「アヤズ・イスハキ」ノ率キルモノ第三ハ「シヤムグノフ」ノ率キルモノ。本邦在留ノ「トルコ・タタール」人ハ全体テ約六百 [人] ソノ中二百人餘リハ

東京ニ居住シ「クルバンガリー」ノ教會ニ属スル者ナルガ最近「アヤス・イスハキ」一派ニ大分奪ハレタト言フコトデアル、「シヤムグノフ」ハ神戸ニ教會ヲ有シ同地ニ數百ノ信徒ヲ有スル由、此ノ「シヤムグノフ」派ト「アヤス・イスハキ」派トハ異名同體ノヤウダ此ノ派ノ本部ハ神戸ニアツテ京都、名古屋、東京及哈爾濱ニ支部ヲ有ス、「クルバンガリー」派ハ東京澁谷ニ本部ヲ有シ名古屋、神戸及京城ニ支部ヲ有スル趣ナリ<sup>29)</sup>

以上の在日タタール人コミュニティの概況が昭和9（1934）年のいつの時点のものであるのかは不明であり、どの程度正確な情報に基づいたものかは判然としないものの、在名古屋タタール人コミュニティ内においても、イスハキー派とクルバンガリー派とに分かれていた可能性が考えられる。このような状況のなか、イスハキーが昭和9（1934）年1月16日に名古屋に来訪し、同月23日まで滞在した。このイスハキーの滞在は、名古屋在住のタタール人たちのその後の活動に大きな影響を与えた<sup>30)</sup>。上記の『外事警察概況』第4巻において、昭和9年1月に名古屋支部が結成されたと記されていることが、それを裏付けているだろう。

そして、「和泉橋倶楽部乱闘事件」発生直後の名古屋在住のタタール人の動向に関して、昭和9（1934）年2月23日付の兵庫県知事白根竹介発の文書<sup>31)</sup>には、以下のような記述がみられる。

……〔神戸トルコ・タタール協会は〕如斯事件〔＝和泉橋倶楽部乱闘事件〕ハ日本亡命同族間ノ一大汚辱ナリ須ク事ノ真相ヲ明確ニシ同時ニ同族ノ覚醒ヲ計ラザルベカラズトナシ遂ニ東京並ニ名古屋ノ同志ニ呼ビカケルベク……（中略）……フサイン・アーチショフハ〔2月〕十六日午前六時神戸駅発列車ニテ名古屋ニ……（中略）……出発東上シ……（後略）

このように、イスハキーを支持する在神戸タタール人コミュニティは、名古屋在住のタタール人たちを自分たちの側につけるために、フサイン・アーチショフという人物を名古屋に派遣した。さらに、昭和9（1934）年3月6日付の兵庫県知事白根竹介発の文書<sup>32)</sup>には、「神戸、名古屋代表上京委員会十一名ノ二月十一日東京ニ於ケル椿事〔＝和泉橋倶楽部乱闘事件〕ニ對スル決議」が所収されており、この時点で名古屋在住のタタール人たちの何人かは神戸のタタール人コミュニティと行動を共にしていた。上記の委員会11名のうち5名は名古屋の代表者であり、その5人とは、Husain Kilki, Husnutdin Said-Gali, Timerbey Hamidullah, Devletshah Sezgan, Ahmed Arslanであった<sup>33)</sup>。Timerbey Hamidullah以外の4人は既述であり、当時の在名古屋タタール人コミュニティの主導的なメンバーであった。

以上のように、在名古屋タタール人コミュニティは、クルバンガリー派とイスハキー派の対立が東京で深刻になった時、イスハキー派あるいは神戸のタタール人たちに歩調をあわせた。そして、イスハキーが昭和9（1934）年2月23あるいは24日<sup>34)</sup>に、クルバンガリーの東京回教徒団に対抗するため、反クルバンガリーでイスハキーを支持する者たちを糾合して、在日タタール人親睦団体として「イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会」を東京に設立すると、上記のように名古屋支部も昭和9（1934）年3月30日に創設された。

ただし、この時点で名古屋在住のタタール人全員がイスハキー派となったかは不明である。それでも昭和9（1934）年8月11日付の記録では、名古屋在住のタタール人40人のうちイスハキー派が40人である一方で、クルバンガリー派の数は記されていないことから<sup>35)</sup>、遅くともこの時

## 戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 (2)

点までには、名古屋在住のタタール人のほぼ全員がイスハキー派となったと思われる。

名古屋在住のタタール人がイスハキー側あるいは在神戸タタール人コミュニティ側についてた理由としては、イスハキー個人の影響力もあるが、在名古屋コミュニティの有力者のひとりハミドリン（上記のTimerbey Hamidullah）と、昭和6（1931）年2月に神戸トルコ・タタール協会<sup>36)</sup>の会長となっていたシャムグニShamguni<sup>37)</sup>との緊密な関係<sup>38)</sup>も影響したと思われる。

昭和9（1934）年3月以降の名古屋支部については、同年5月9～12日にかけて、神戸の愛隣会館において「日本イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會聯合會」の設立大会が開催された。そこでは、本部を当分の間、神戸市葺合區上筒井通四丁目十二にあった神戸イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會<sup>39)</sup>に置くこととなった。しかし、昭和10（1935）年2月4～14日にかけて、奉天においてイスハキー主催のもとで開催された「イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會極東大會」において、極東イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會本部は奉天に常設されることになったため、「日本イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會聯合會」は解消し、東京、名古屋、神戸、熊本、朝鮮の五支部は、極東イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會本部に直属することになった<sup>40)</sup>。

### (2) 団体の概要

殆どの会員は名古屋回教徒団からの継続であった<sup>41)</sup>。会員数は、昭和11（1936）年では29名<sup>42)</sup>、昭和12（1937）年では33名<sup>43)</sup>、昭和13（1938）年では48名<sup>44)</sup>、昭和15（1940）年では42名<sup>45)</sup>となっている。同時期の名古屋在住のタタール人人口は50人台であったため<sup>46)</sup>、彼らの多くが名古屋支部の会員になっていたと思われる。

会則については、名古屋支部のものは不明であるが、昭和9（1934）年8月に結成された「イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會九州支部」関連の文書に所収されている「イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會々則」が参考になる（資料参照<sup>47)</sup>。実際、第三条の「本會ハ「トルコ・タタール」人ノ歴史文化ノ保存日本文化ノ攝取ニヨル生活ノ向上及ビ相互ノ親睦トシ目的トス」と同様の文言は、名古屋支部の目的（「トルコ・タタールの歴史文化の保存日本文化攝取による生活の向上相互の親睦」）としても記されている<sup>48)</sup>。

事務所の所在地は、昭和10（1935）年では西区北押切天神山にあったイスラム学校が事務所を兼ねていたが<sup>49)</sup>、昭和11（1936）年では「名古屋市東區今池町三ノ九」<sup>50)</sup>、昭和12（1937）年では「名古屋市東區今池町三ノ四十五」<sup>51)</sup>、昭和13（1938）年では「名古屋市千種區今池町三丁目百三十五」<sup>52)</sup>、となっている。昭和11（1936）年11月中旬に完成した名古屋モスクが、当時の東區今池町3丁目135番地に建設されたことを踏まえると、昭和11年よりタタール人コミュニティの中心は東區今池町3丁目になっていたと思われる。

### (3) 活動の諸相

本節ではまず、本稿末尾に挙げた表の補足説明をした後、名古屋支部の重要な活動といえる、教育と名古屋モスクの建設に関して概観する。

## ①表の補足説明

表にある活動を年代順に補足すると、昭和10（1935）年2月に奉天において開催されたイデル・ウラル・トルコ・タタール・文化協会極東大会において、在名古屋タタール人からは、財務委員会のメンバーとしてファイゼラフマン・マクシュトフが、学務部員のメンバーとしてバイムハメトフが任命されている<sup>53)</sup>。同年3月22日に開催された定期総会では、タタール民族救済寄付金、在奉天極東トルコ・タタール文化協会本部費寄付金の件を決議し、役員選挙を行った<sup>54)</sup>。

昭和11（1936）年10月の支部幹部会では、警視庁において分課容疑者として検挙された同国人の釈放に関して協議の結果、会員連名署名のうえ、警視庁に対し釈放に関する嘆願書を提出することとなった。そして、在東京同国人ザキイセデコフを通じ嘆願書を10月18日に警視庁に提出した<sup>55)</sup>。

昭和12（1937）年には、恤兵献金が何度か行われているが、その理由としては「今次〔北支〕事變と共に我國銃後國民の熱烈なる愛國熱に感激し同志相寄り……」とある<sup>56)</sup>。9月7日には、少女たち<sup>57)</sup>が広小路栄町に立って通行人に千人針を求めた。なお、表には記されていないが、この年以降も軍隊への寄附は継続していたかもしれない<sup>58)</sup>。

昭和14（1939）年11月24～25日には回教徒視察団が名古屋を訪問している。一行のスケジュールとして、11月24日午後6時に名古屋駅到着、愛知県・名古屋市・名古屋商工会議所共同主催の晩餐会が催され、観光ホテルに宿泊した。翌25日は愛知県庁、名古屋市庁を訪問、名古屋城見物、名古屋松坂屋訪問、松坂屋主催午餐会、東山動物園見物、回教禮拜堂（＝名古屋モスク）参拝、午後6時20分名古屋駅を出立した<sup>59)</sup>。名古屋在住のタタール人は一行を歓迎し、接待役として上記の各地の訪問・見学に随行したと考えられる。

昭和17（1942）年4月28日に開催された「マホメット生誕祭」には30名が出席した。その状況として、「支部長ハミドリンの司會に依り〔名古屋モスク〕正面祭壇に向ひ〔イスラームの〕教祖マホメット生誕祝賀禮拜並祝賀歌を合唱し終つて一同〔名古屋モスク〕階下食堂に於て簡單なる會食をなし次で追想會に移りハミドリンよりマホメット降誕よりイスラム教の歴史傳統を説教し各自懇談の後散會せり」と記されている<sup>60)</sup>。

## ②教育

上記の昭和8（1933）年9月に設立された「イスラム學校」は、名古屋回教徒団が解消して名古屋支部が設立された後も存続した。昭和10（1935）年には児童数（舊露國人のみ）は20名に達した。彼らの教科書は、昭和10年では名古屋支部において、四冊（「一年生用算術教科書」、  
「二年生用讀方算術教科書」、  
「三年生用地理教科書」、  
「文法書」）が「謄寫版」にて各二十部印刷されていた<sup>61)</sup>。昭和11（1936）年には、「タタール系舊露國人就學児童五、六年生用修身教科書」が神戸より送付されている<sup>62)</sup>。昭和12（1937）年には、日本語教師が招聘<sup>63)</sup>されているが、詳細は不明である。

具体的な教育活動に関しては、昭和11（1936）年9月13日付の『新愛知』<sup>64)</sup>に以下のような記事がみられる。

……日本の新聞が讀め邦字の手紙位は書けるやうでなければいけないとあつてハミドリンさ

## 戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 (2)

んのお隣りの [フセイン・] キリケーフさんの宅を今池町の教會 [=名古屋モスク] 竣工までの學校にあて、彼等の學齡児童十二人を集めバウム・ハメリ<sup>65)</sup>さん、本紙 [=『新愛知』] 天神山販賣店主吉田源一さんの二人が先生となって熱心に教えてをり、同町 [=天神山] 二丁目西部の町總代長谷川斧さんが顧問となって一切を世話してをり…… (後略)

このように、近隣の日本人の協力を得ながらタタール人児童の教育は行われていたと考えられる。また、名古屋モスク完成後は、その2階が學校(教室)として使われていた<sup>66)</sup>。

### ③名古屋モスクの建設

建設にむけた活動は昭和10(1935)年に始まる<sup>67)</sup>。同年3月9日にハミドリンを長とする建設委員が設立されて、8月には30m<sup>2</sup>の土地を1500円で購入した<sup>68)</sup>。昭和11(1936)年1月18日には、名古屋市(あるいは日本政府)から建設許可を得た<sup>69)</sup>が、在名古屋タタール人だけでは資金の確保が難しく<sup>70)</sup>、また各地から募った寄付金も僅少であったため、同年半ばに建設活動は一時中断した。しかし、在神戸旧露国人アグルジGismatullah Agurji<sup>71)</sup>により1000円を借り入れて、同年8月25日に建築が再開された<sup>72)</sup>。9月4日には定礎式が行われ、礎石にはアグルジとイスハキーの名が刻まれた<sup>73)</sup>。そして、名古屋モスクは同年11月中旬に完成した<sup>74)</sup>。

名古屋モスクの落成式<sup>75)</sup>は昭和12(1937)年1月22日午後<sup>76)</sup>に始まり、タタール人100人余りが会合した。さらにはエジプト、トルコ、アフガニスタン、イラン、アラブやインドの穆斯林も集まり、奉天、支那、東京、神戸方面からの参加者もみられた。名古屋以外からの主な来賓としては、極東イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会本部副会長ギザトウリン、神戸から馳せ参じた東洋トルコ・タタール文化協会宗教委員長イマム・シャムグニなどがいた<sup>77)</sup>。

落成式はアグルジが名古屋モスクの扉を開け、シャムグニが金曜礼拝を行った。午後2時<sup>78)</sup>からは東区社会館において祝賀会が開催された。会場には正面に日本の国旗を挟んでトルコ国旗と同教会(協会)旗とが下げられていた。祝賀会の幹事セズガンD. Sezganがシャムグニのスピーチを許可した。シャムグニはこの祝賀会の重要性を述べ、彼の話は日本人MuslimのAhmed Ariga(有賀文八郎, 1866-1946)<sup>79)</sup>によって日本語に訳された。さらに、イマームであるキルキーが在名古屋タタール人コミュニティの歴史について話し、祝辞を述べた。建設委員長長のハミドリンはタタール語と日本語で、名古屋モスク建設の援助者全てに感謝の意を述べた。極東イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会本部の祝辞はギザトウリンによってタタール語と日本語で伝えられた。上記の有賀がイスラームの略史を話し、幸田海軍大佐がトルコと日本の関係史について話をした。会は8時に閉会した<sup>80)</sup>。翌日午後6時半からは同館にて、青年有志たちによってタタール族の劇「夢」が上演された。

## (4) 他のタタール人コミュニティとの関係

### ①在奉天イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会本部との関係

昭和10(1935)年2月4~14日にかけて、奉天においてイスハキー主催のもとで開催された「イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會極東大會」で決定された様々な規則や議決事項<sup>81)</sup>を名古屋支部は遵守し、本部との連絡もとっていたようである。たとえば、昭和10(1935)年3月

22日の名古屋支部の定期総会では「在奉天極東トルコ・タタール文化協會本部費寄附金」について決議しており、同年8月18日には本部より名古屋支部に通信があった<sup>82)</sup>。このほか、昭和12(1937)2月23日の「イスハキーの著作活動40周年祝賀会」は本部の指示によって開催されたと思われる<sup>83)</sup>、昭和16(1941)年8月28日から9月1日まで奉天で開催された「極東イデルウラルトルコタタール民族第二回大会」にも代表を派遣している(表参照)。

## ②東京や神戸などとの関係

名古屋支部の設立後、東京回教徒団によって開催された、「コーラン出版記念祝賀会」(昭和9(1934)年6月7日)<sup>84)</sup>、「東京回教徒団創立十週年記念祭」(昭和10(1935)年1月27日)<sup>85)</sup>、「禮拜堂(=東京モスク)起工式」(昭和12(1937)年10月19日)<sup>86)</sup>などにおいて、名古屋在住のタタール人が出席した形跡はみられない。これは、協調関係にあった神戸在住のタタール人と歩調を合わせたためであろう<sup>87)</sup>。実際、上記のように東京回教徒団との関係が「断絶」している間にも、在神戸ムスリム・コミュニティにおける「神戸回教寺院祝賀会」(昭和10(1935)年10月11日)には在名古屋タタール人コミュニティの代表者たちが出席している(表参照)<sup>88)</sup>。

しかし、昭和13(1938)年5月12日の東京回教団寺院(=東京モスク)落成式には名古屋から9人<sup>89)</sup>が参加しており(表参照)、この時には東京との関係は「回復」したと思われる。その理由は、在日ムスリム団結の障害とされていたクルバンガリーの逮捕(同年5月5日)が考えられる。クルバンガリーの国外退去(6月)後は、昭和13(1938)年6月24日に「東京イスラム教団」、5月20日に「日本在留「イスラム」教団联合会」が結成された<sup>90)</sup>。前者は、二つに分裂した在東京ムスリムを統合する団体であり、アブデュルレシト・イブラヒム<sup>91)</sup>が団長となった。後者は同年7月8日には「大日本イスラム教団联合会」と名称が変更されて、東京を中心として、地方のムスリム・コミュニティを統制下に置こうとしていた。ただし、その活動については不明な点が多い。実際には、名古屋支部の名称は存続した<sup>92)</sup>ので、実質的な影響は殆どなかったといえる。

他の都市のコミュニティとの繋がりを示す事例として、昭和11(1936)年4月19日に青年団が結成された理由として「東京、神戸に於ける[イデル・ウラル・トルコ・タタール]文化協會が既に青年團を結成し進歩的文化運動を爲しつつあるに鑑み……」とある<sup>93)</sup>。同年10月に既述のように、警視庁に検挙された同国人の釈放に関して、在東京タタール人ザキイセデコフを通じて嘆願書を10月18日に警視庁に提出した件も、同様の行動は神戸イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會もイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會九州支部もとっていた<sup>94)</sup>。また、昭和12(1937)年の献金活動(表参照)は名古屋支部独自のものではなく、同年に東京回教団においても<sup>95)</sup>、神戸支部においても同様の献金がみられた<sup>96)</sup>。さらには、表にあるように、昭和16(1941)年4月8日に挙行された「マホメット聖誕祭」は、同日に東京イスラム教団も開催している<sup>97)</sup>。昭和17(1942)年2月18日にシンガポール陥落を祝し、同年12月8日には大詔奉戴日(太平洋戦争開戦1周年)が行われているが(表参照)、これらはいずれも神戸においても開催されている<sup>98)</sup>。

以上をまとめると、在名古屋タタール人コミュニティは他の都市のコミュニティと関係を保持



し、とくに神戸との繋がりが深かったようである。そして、日本国内の各都市のタタール人コミュニティは互いに緊密な交流をもとに、一体とした行動をとっていたことがうかがえる。

## まとめ

本稿では、戦前期に名古屋に在住していたタタール人たちによって結成された2つの団体、名古屋回教徒団と名古屋支部（イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部）それぞれの概要と活動、他都市のタタール人コミュニティとの関係について検討した。その結果は、以下のようにまとめることができる。

① 名古屋回教徒団は、クルバンガリーを中心とする東京回教徒団の「支部」のかたちで、ムスリムの親睦団体として昭和6（1931）年3月に設立された。ただし実際には、会員の殆どは当時の名古屋に居住していたタタール人であった。名古屋回教徒団の名称のもとでの活動、およびその名称は遅くとも昭和9（1934）年8月までには自然消滅したと思われる。規約に従えば、年に数回の会合をしていたようであるが、活動の詳細は不明である。名古屋回教徒団が存続していた可能性がある時期に実施された具体的な活動のひとつとして、昭和8（1933）年9月のイスラム学校の建設がある。

② 名古屋支部の正式な結成は昭和9（1934）年3月30日であるが、それ以前より東京のクルバンガリーとの関係は疎遠になっており、実質的には同年1月に名古屋タタール人の多くはイスハキー派あるいは反クルバンガリーになったと考えられる。会員の多くは名古屋在住のタタール人であり、さらに彼らの殆どは名古屋回教徒団から名古屋支部に移行したようである。

名古屋支部設立以降の活動は現時点で確認できたかぎり、本稿末尾にある表のとおりである。表からは定期的に開催されたイベントとして、ほぼ毎年3月か10月に総会、クルバン祭やマウリド祭などイスラームに関する様々な祝祭、タタール人の「偉人」に関する会合などがあつた。すなわち、名古屋在住のタタール人のあいだでは、ムスリムとしてのアイデンティティとともに、タタール人としてのアイデンティティも保持されていたことを意味する。また、結成時より昭和16（1941）年までは様々な活動が行われたが、戦争が長期化するにつれて、活動は縮小していったようである。

③ 昭和10（1935）年2月に極東イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会本部が奉天に常設となった後は、寄付金の送付やメンバーが本部の各委員会のメンバーに任命されるなど、名古屋タタール人たちは本部の活動に積極的に貢献した。

日本国内の他都市のタタール人コミュニティとの関係については、遅くとも昭和6（1931）年1月からはクルバンガリーを中心とする東京回教徒団との繋がりが強かった。しかし、昭和9（1934）年1月までにはクルバンガリーの影響力からはほぼ離脱し、イスハキー派、とくに在神戸タタール人コミュニティとの繋がりが深くなり、東京回教徒団（クルバンガリー）との関係は「断絶」した。クルバンガリーが逮捕された直後の昭和13（1938）年5月からは、

東京との関係も再開された。同年7月には地方のムスリム・コミュニティを統制下に置くことを目的として、東京に「大第日本イスラム教団联合会」が設立されたが、その実質的な影響は殆どなかったと思われる。また、東京との関係は一時期断絶期間があったが、神戸との緊密な関係は断絶することなく保持された。

今後の課題としては、史料の制約はあるものの、戦前期の在名古屋タタール人コミュニティをめぐる人的繋がりを考察することで、彼らの社会活動の一端を明らかにしたい。

## 註

- 1) 入国管理局では入国者の宗教についての統計を採っていないため、正確な数を把握することは困難である。それでも、ひとつの目安として、平成23(2011)年12月31日時点での愛知県における「外国人登録者数」(愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室調べ、<http://www.pref.aichi.jp/cmsfiles/contents/0000048/48722/all.pdf>)より、名古屋市在住のイスラーム協力機構加盟国の者たちの数を抽出すると、その数は2117人である。この数値を踏まえて、イスラーム協力機構加盟国国籍の者が全員ムスリムとはかぎらないことに加えて、イスラーム協力機構加盟国以外の国の国籍を持つムスリムや邦人ムスリムも居住していることも配慮して、本文にあるように2000~3000人と推計した。  
なお、平成24(2012)年12月31日時点での愛知県の「外国人登録者数」(愛知県地域振興部国際課多文化共生推進室調べ、<http://www.pref.aichi.jp/cmsfiles/contents/0000059/59106/24all.pdf>)では、名古屋市の国籍別内訳は、上位10カ国の住民数しか掲載されていない。
- 2) 近年の名古屋市におけるムスリムの動向に関しては、中西久枝「ふたつの時間軸のなかで：名古屋モスクのイスラーム暦とムスリムたち」『民博通信』109(2005)、14-15頁；服部美奈「在日インドネシア人ムスリム児童の宗教的価値形成—名古屋市における自助教育活動の事例から—」『異文化コミュニケーション研究』19(2007)、1-28頁；倉沢幸「名古屋地域のモスクとムスリム・コミュニティ」『アジア遊学』117(2008)、152-155頁などの論考がある。
- 3) 吉田達矢「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相：人口推移と就業状況を中心に」『名古屋学院大学論集：言語・文化篇』24-2(2013)(以下、吉田2013)、281-291頁。
- 4) Larisa Usmanova, *The Türk-Tatar Diaspora in Northeast Asia*, Tokyo: Rakudasha, 2007(以下、Usmanova2007)では、前者を「mahallyah Islamie」(p. 103)、後者を「the Cultural Society of the Idel-Ural Türk-Tatars」(p. 103)と表記している。
- 5) 吉田2013、285頁。
- 6) また、愛知懸知事尾崎勇次郎発、内務大臣・外務大臣・警視廳・各廳府懸長官ほか宛、昭和7年2月13日付、「マホメット教徒ノ會合ニ関スル件」(JACAR(アジア歴史資料センター)、Ref. B04012533000、本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件/回教関係、第一巻分割1(I-2-1-0-006)、外務省外交史料館、10画像目)においても、「……禮拜ハ毎年一、二回ハ行フヲ慣例トスルモノニシテ……(後略)」と記されている。
- 7) 愛知懸知事香坂昌康発、内務大臣・外務大臣・警視廳・各廳府懸長官ほか宛、昭和6年3月27日付、「名古屋回教徒團設立ニ関スル件」(JACAR, Ref. B04012533000、本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件/回教関係、第一巻分割1(I-2-1-0-006)、外務省外交史料館、7画像目)。  
一方、名古屋回教徒団設立の日付を、昭和6(1931)年3月21日とする史料もある(内務省警保局(編)・石堂清倫(解題)『極秘 外事警察概況』(以下、『外事警察概況』)、4巻、龍溪書舎、1980、94頁)。いずれにせよ、昭和6年3月に設立されたことは間違いないであろう。

## 戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 (2)

- 8) なお、東京回教徒団の設立を昭和3 (1928) 年10月3日とするものもある (松長昭『在日タタール人：歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』, 東洋書店, 2009年 (以下, 松長2009), 10頁; メルトハン・デュンダル「私は夢も日本語で見ていた:トルコ・タタール移民の活動」塩川伸明ほか (編)『ユーラシア世界2:ディアスポラ論』, 東京大学出版会, 2012年 (以下, デュンダル2012), 216頁など)。その根拠は『外事警察概況』1, 158頁の記載と思われるが、本稿では、西山克典「クルバンガリー—追悼—国際情勢に待機して— (1)」『国際関係・比較文化研究』(静岡県立大学国際関係学部) 4-2 (2006) (以下, 西山2006a), 85 (337) 頁 (註31) の説明に従った。実際、昭和10 (1935) 年1月27日に「東京回教徒団創立十周年記念祭」が舉行されている (『外事警察概況』1, 159頁)。
- 9) クルバンガリーについて詳しくは、西山2006a; 西山克典「クルバンガリー—追悼—国際情勢に待機して— (2)」『国際関係・比較文化研究』(静岡県立大学国際関係学部) 5-1 (2006), 93-109頁; 松長昭「東京回教団長クルバンガリーの追放とイスラーム政策の展開」坂本勉 (編著)『日中戦争とイスラーム：満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』, 慶應義塾大学出版会, 2008年, 179-232頁 (以下, 松長2008) などを参照。
- 10) 正確な住所は渋谷区代々木富ヶ谷町1461番であった (デュンダル2012, 217頁)。
- 11) 愛知懸知事岡正雄発, 内務大臣・外務大臣・警視廳・各廳府懸長官ほか宛, 昭和6年1月10日付, 「回教徒學校新築落成式祝賀會出席ニ関スル件」(JACAR, Ref. B04012533000, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係, 第一巻分割1 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 4画像目)。
- 12) 『名古屋市第三十三回統計書』, 名古屋市役所, 1933年, 53頁。なお、同年の名古屋市には、「土耳其」人も男3人, 女2人が在留していた。
- 13) 上記「名古屋回教徒團設立ニ関スル件」, 8画像目。
- 14) 本文上記のサイガレーフと同一人物と思われる。
- 15) 上記「名古屋回教徒團設立ニ関スル件」, 8画像目。
- 16) Usmanova2007, p. 103.
- 17) Usmanova2007, p. 103.
- 18) 東長靖「モッラー」大塚和夫ほか (編)『岩波イスラーム辞典』, 岩波書店, 2002年, 1066頁。
- 19) 上記「マホメット教徒ノ會合ニ関スル件」, 10-11画像目。
- 20) 註19で挙げた史料では12名となっているが、正確には11人分の名前しか記されていない。11人各人の名前、職業、住所については、吉田2013を参照。
- 21) 彼の略歴については、吉田2013, 290頁を参照。
- 22) 『外事警察概況』1, 167頁。
- 23) 松長2008, 185頁; デュンダル2012, 218頁。
- 24) 『外事警察概況』3, 154頁; 松長2009, 18頁; Usmanova2007, p. 104など。
- 25) 『外事警察概況』4, 94頁。
- 26) アヤズ・イスハキーについて詳しくは、松長昭「アヤズ・イスハキーと極東のタタール人コミュニティ」池井優・坂本勉 (編)『近代日本とトルコ世界』, 勁草書房, 1999年, 219-263頁を参照。
- 27) 松長2009, 11, 14-15頁。実際、『外事警察概況』においても、「昭和六 [1931] 年夏 [東京回教徒団] 團員中の舊露國人十数名が不良行為に因り論旨送還せられたる事件に端を發して内部の結束亂れ反クルバンガリーの分子の簇出を見るに至れり」という記述がみられる (『外事警察概況』1, 158頁)。
- 28) 松長は「和泉橋俱樂部乱闘事件」の概要を以下のように説明している。「1934 (昭和9) 年2月11日, 和泉橋俱樂部 (当時, 東京市神田区岩本町) において, トルコ学者大久保幸次が開催した「トルコ民族歴史研究講演会」の会場にクルバンガリー派が突如乱入してイスハキーを殴打暴行し, これに怒ったイスハキー派が応酬して会場が騒然となり, 警察の介入によりその場を鎮めたという事件であった。」(松長2009, 15頁)

- 29) 「在本邦回教徒「トルコ・タタール」人忿争問題（昭和九年調査）」(JACAR, Ref. B04012533000, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係, 第一巻分割1 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 30画像目)
- 30) Usmanova2007, p. 103.
- 31) 兵庫県知事白根竹介発, 外務大臣・内務大臣・警視庁・各廳府懸長官ほか宛, 昭和9年2月23日付, 「神戸回教徒ノ東京クルバンガリー排斥ニ関スル件 (第二報)」(JACAR, Ref. B04012533000, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係, 第一巻分割1 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 40画像目)
- 32) 兵庫県知事白根竹介発, 外務大臣・内務大臣・警視庁ほか各長官・在上海内務書記官・在哈尔滨内務事務官宛, 昭和9年3月6日付, 「神戸回教徒ノ在東京クルバンガリー排斥ニ関スル件 (第三報)」(JACAR, Ref. B04012533000, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係, 第一巻分割1 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 49画像目)
- 33) Usmanova2007, p. 216 (註245).
- 34) 結成日は, 松長2009, 17-18頁では昭和9 (1934) 年2月23日, 『外事警察概況』2, 182頁では, 昭和9 (1934) 年2月24日となっている。
- 35) 熊本県知事鈴木敬一発, 内務大臣・外務大臣・各廳府懸長官ほか宛, 昭和9年8月11日付, 「アヤスイスハキ来熊ニ関シ在熊旧露国人ノ意嚮ニ関スル件」(JACAR, Ref. B04012533100, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係, 第一巻分割2 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 21画像目)。  
 なお, 同頁には, 以下のような各都市のタタール人コミュニティにおけるイスハキ派とクルバンガリー派の人数の一覧が示されており, 昭和9年8月時点では, 東京と京城以外ではイスハキ派が圧倒的多数であったことが分かる。

合 計	九 州	天 津	神 戸	名 古 屋	東 京	釜 山	大 邱	京 城	ハルビン	奉 天	ハイラル	地 名
二四四八	三〇	一〇〇	一二〇	四〇	九〇	十	八	五〇	一〇〇〇	一〇〇	九〇〇	居住者数
二三七二	三〇	一〇〇	一二〇	四〇	五〇	十	五	二七	一〇〇〇	九〇	九〇〇	イスハキ派
七六					四〇		三	二三		一〇		クルバンガリー派

- 36) 昭和2 (1927) 年12月に結成された (『外事警察概況』1, 165頁)。
- 37) Modiar Shamguni (1873/74-1939)。昭和3 (1928) 年に上海より来神。以降, イマームとして在神戸ムスリム・コミュニティで活躍し, 昭和6 (1931) 年2月には神戸トルコ・タタール協会会長となった。昭和14 (1939) 年6月18日死去 (福田義昭「神戸モスク建立前史—昭和戦前・戦中期における在神ムスリム・コミュニティの形成—」白枡陽 (研究代表者) 『日本・イスラーム関係のデータベース構築—戦前期回教研究から中東イスラーム地域研究への展開—』(平成17年度~平成19年度科学研究費補助金基盤研究(A) 研究成果報告書(課題番号20320095)), 2008年 (以下, 福田2008), 35, 56 (註97) 頁)。

## 戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 (2)

- 38) 昭和14 (1939) 年1月には、シャムグニの著作の日本語訳がハミドリンなどの手によって、名古屋で刊行されている (ミヂヤル・シャムグニ (城南臥牛 (テ・ハミドリン) 譯) 『アルラーの神と豫言者達』, 名古屋, 1939年)。また、名古屋モスクの落成式において配布された冊子には、シャムグニの短文が所収されている (*The Nagoya Muslim Mosque*, 名古屋トルコ・タタールイスラム教會, 1937年, 13-16頁)。
- 39) 昭和9 (1934) 年4月に設立されている。なお、神戸イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会の設立により、神戸トルコ・タタール協会は解散した (『外事警察概況』1, 165-166頁)。
- 40) 『外事警察概況』1, 166頁。
- 41) 『外事警察概況』4, 94頁。
- 42) 『外事警察概況』2, 182, 189頁。
- 43) 『外事警察概況』3, 159頁。
- 44) 『外事警察概況』4, 94頁。
- 45) 『外事警察概況』5, 304頁。
- 46) 吉田2013, 285頁。
- 47) 熊本県知事鈴木敬一発, 内務大臣・外務大臣・各廳府懸長官ほか宛, 昭和9年8月15日付, 「イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會九州支部結成ニ関スル件」(JACAR, Ref. B04012533100, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係 第一巻分割2 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 25-26画像目)
- 48) 『外事警察概況』2, 189頁。
- 49) 『外事警察概況』1, 167頁。
- 50) 『外事警察概況』2, 189頁。
- 51) 『外事警察概況』3, 154頁。
- 52) 『外事警察概況』4, 94頁。
- 53) 関東局警務局長発, 對滿事務局次長・外務次官・内務省警保局長ほか宛, 昭和10年2月9日付, 「極東トルコタタール回教徒民族大會開催状況」(JACAR, Ref. B04012396500, 各国ニ於ケル協會及文化団体関係雑件 / 満洲国ノ部2。「イデルウエルトルコタール」民族文化協會 (I-1-10-0-013), 外務省外交史料館, 8, 39画像目)
- 54) 『外事警察概況』1, 168頁。
- 55) 『外事警察概況』2, 189頁。
- 56) 『外事警察概況』3, 153頁。
- 57) 昭和12 (1937) 年9月8日付の『大阪朝日新聞』と『名古屋新聞』によると、千人針を集めるために街頭に立った少女というのは、ハリラ・キリケーフ (12歳), アラゼヤ・アフンザ (12歳), シャフイカ・マスコット (11歳) であった。彼女たちはいずれも日本で生まれ、当時は東区今池町に住んでいた。
- 58) 昭和57 (1982) 年時点で名古屋モスクのあった場所に住んでいた渡辺長十氏の談話のなかに、「……またあの戦争中はこのハミドリン氏が音頭をとっていたのか日本軍の兵隊の中で負傷した兵にホウ帯や薬などを寄付したりしていました。」という記述がみられる (小村不二男『日本イスラーム史：戦前、戦中歴史の流れの中に活躍した日本人ムスリム達の群像』, 日本イスラーム友好連盟, 1988年 (以下, 小村1998), 301頁)。
- 59) 『記録 回教圏展覧會:全世界回教徒第一次大會來朝回教徒視察團』, 大日本回教協會, 1940年, 24, 98-99頁。
- 60) 『外事警察概況』8, 640頁。
- 61) 『外事警察概況』1, 167頁。
- 62) 『外事警察概況』2, 188頁。
- 63) 『外事警察概況』3, 154頁。
- 64) 『新愛知』16189。

- 65) 昭和11～12 (1936～37) 年には名古屋支部の書記を務めていた。
- 66) 小村1988, 301頁。
- 67) 建設理由としては、「……何とかしてイスラム教會を建設して之を共同禮拜所となし合わせて子女の普通教育機關にしたいと思ふて…… (後略)」とされている (*The Nagoya Muslim Mosque*, 5頁)。
- 68) Usmanova2007, p. 105. 一方, 別の史料では、「……名古屋市東區千種町地内にて三十四坪餘を金一千四百餘圓にて買収したるが…… (後略)」と記されている (『外事警察概況』1, 167頁)。
- 69) Usmanova2007, p. 105 (MB63: 6).
- 70) 在名古屋タタール人だけで確保した建築資金は四百円であった (『外事警察概況』2, 189頁)。
- 71) *The Nagoya Muslim Mosque*, 9-10頁では, 彼の略伝が当時の在名古屋タタール人コミュニティの代表であったフサイン・キルキーによって記されている。アグルジは, 1922年に来日し, 昭和6 (1931) 年2月まで2期にわたって神戸トルコ・タタール協会の会長を務めた (福田2008, 35頁)。
- 72) 『外事警察概況』2, 189頁。
- 73) Usmanova2007, p. 105 (MB63: 6).
- 74) 名古屋モスクの建設過程についてははまだ不明な点が多いものの, 日本人が関与していたことは, 次の談話からうかがえる。すなわち渡辺長十氏は, 「この[名古屋]モスクのあった一帯の土地は当初この県[=愛知県]の知多郡のハタヤ (織物商) が所有していたものでしたが商売が巧くいかなくなって分譲した。私 [渡辺長十氏] もその一区画を購入したが, この前の区画をある名古屋の人が買ってモスクを造りトルコ人 [タタール人] に与えたようです。この奇篤な人物の名前は亡妻のカギがよく知っていたようです。」と述べている (小村1988, 301頁)。  
このほか, 「……又日本人の篤志家に援助を請ひて茲に目的を貫徹して名古屋イスラム教院 [=名古屋モスク] を建設することが出来たのであります。」という記述もある (*The Nagoya Muslim Mosque*, 5頁)。
- 75) 以下の本文における落成式の様子は, Usmanova2007, p. 105; 『新愛知』16319; 『名古屋新聞』14686; 『大阪朝日新聞』19846 (3紙とも昭和12 (1937) 年1月23日) によっている。
- 76) 各紙では午後1時となっているが, Usmanova2007, p. 105では午後0時となっている。
- 77) 日本人の来賓については, 別稿にて紹介する予定である。
- 78) 『新愛知』16319では, 午後2時40分開式となっている。
- 79) 有賀の略伝は, 小村1988, 151-166頁を参照。有賀と在名古屋タタール人コミュニティとの関係については, 別稿にて検討する予定である。
- 80) 『新愛知』16319では, 午後4時過ぎとなっている。
- 81) 上記「極東トルコタタール回教徒民族大會開催状況」, 20-24画像目。
- 82) 通信の内容は以下のとおりである。  
「アヤス・イスハキの反対派なるクルバンガリー一派の策動は哈爾賓に於て行はれつゝあり, アムルウラ・アゲーフは哈爾賓に在りて元トルコ・タタール協會の重要な地位を占め居りたるもクルバンガリー一派なる事判明し除名されたる爲最近露國政府と提携し反アヤス・イスハキ運動を爲しつゝあるも未だ問題とするに足らざるものなり云々。」 (『外事警察概況』1, 168頁)
- 83) 同年2月24日に神戸においても, 「アヤスイスハキ著作生活四十年祝賀會」が開催されているが, それは「在奉天極東イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會聯合本部」の提唱であった (『外事警察概況』3, 153頁)。このため, 名古屋市支部における同様の祝賀会も本部からの指示があったと思われる。
- 84) 警視總監藤沼庄平発, 内務大臣・外務大臣ほか宛, 昭和9年6月8日付, 「東京回教團ノ「コーラン」出版記念祝賀會状況ニ関スル件」(JACAR, Ref. B04012533100, 本邦ニ於ケル宗教及布教關係雜件 / 回教關係 第一卷分割2 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 9-10画像目)

## 戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 (2)

- 85) 警視總監小栗一雄発, 内務大臣・外務大臣ほか宛, 昭和10年1月29日付, 「東京回教徒団創立十週年記念祭状況ノ件」(JACAR, Ref. B04012533000, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係 第一巻分割1 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 91-92画像目)
- 86) 警視總監斎藤樹発, 内務大臣・外務大臣ほか宛, 昭和12年10月25日付, 「東京回教團ノ禮拜堂起工式舉行ニ関スル件」(JACAR, Ref. B04012533200, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係 第一巻分割3 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 1-2画像目)
- 87) 福田義昭「戦中期における国内ムスリム団体の統制と「回教公認問題」—在神戸ムスリム・コミュニティの視点から—」『アジア文化研究所研究年報(東洋大学アジア文化研究所)』47(2013)(以下, 福田2013), 160(73)頁。
- 88) 在名古屋タタール人コミュニティの代表として出席したのは, ジー・ベイムハメトフ, エッチ・キルケーフ, エッチ・サイドガレフ, デー・セズガン(夫妻), エッチ・キルケーフ(女), テー・ハミドリンであった(兵庫縣知事湯沢三千男発, 内務大臣・外務大臣ほか宛, 昭和10年10月28日付, 「神戸回々寺院祝賀會開催状況ノ件」(JACAR, Ref. B04012533100, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係 第一巻分割2 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 64画像目)。
- 89) 在名古屋タタール人コミュニティから出席したのは, シハクロフ, ダウレットサズガン, バイムハメディー, サイトガリエフ, ケルキエフ, アダンナー・ミッドハット, ジェイ・ハンドリン, デブレッチャー・セツカン及令息であった(警視總監安倍源基発, 内務大臣・外務大臣ほか宛, 昭和13年5月16日付, 「東京回教団寺院落成式式典開催状況ノ件(回教関係第二報)」(JACAR, Ref. B04012575600, 本邦寺院関係雑件 / 第一巻7。回教寺院 (I-2-2-0-016), 外務省外交史料館, 8画像目)
- 90) 福田2013, 162(71)頁。
- 91) Abdürreşid İbrahim (1857-1944)。彼に関してはとりあえず, 小松久男『イブラヒム, 日本への旅』, 刀水書房, 2008年を参照。なお, イブラヒムの旅行記の日本滞在部分の翻訳として, アブデュルレシト・イブラヒム(小松香織・小松久男訳)『ジャポニヤ: イスラム系ロシア人の見た明治日本』, 第三書館, 1991年がある。
- 92) たとえば, 昭和15(1940)年の『外事警察概況』6においても(304頁), 昭和17(1942)年の『外事警察概況』8においても(640頁), 「イデル・ウラル・トルコタタール文化協會名古屋支部」と記されている。
- 93) 『外事警察概況』2, 189頁。
- 94) 『外事警察概況』2, 188, 190頁。
- 95) 『外事警察概況』3, 150頁において, 次のように記されている。

「付属小學校の慰問袋寄贈  
東京回教團東京回教學校教師マギセルタル・ヤンラジャ外二十二名は二名の教師と共に九月二十二日午前十一時警視廳外事課に出頭 [し]「今回の事變に對し出征中の帝國軍人に感謝の微意を表すため」と稱し慰問品二十三個を寄贈し度しと携行せるを以て直に陸軍省に回付せり。」
- 96) 『外事警察概況』3, 152頁において, 次のように記されている。

「右協會 [=神戸イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會] に於ては八月一日午後三時神戸市葺谷區上筒井五丁目二〇愛隣會館に於て臨時總會を開催, 參會者三十餘名在滿支皇軍慰問資金献納他二件を決議し爾來協會員間に資金募集中の處八月七日大阪毎日新聞神戸支社を経て金四百圓及慰問袋九〇個の献納手續を了せり。」
- 97) 『外事警察概況』7, 387頁。
- 98) 松長2009, 56-57頁; 『外事警察概況』8, 342頁。

資料：「イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協會々則」

- 第一條 本會ヲ「イデル・ウラル・トルコ・タタール」文化協會ト称ス
- 第二條 本會ノ事務所ヲ東京ニ置ク
- 第三條 本會ハ「トルコ・タタール」人ノ歴史文化ノ保存日本文化ノ摂取ニヨル生活ノ向上及ビ相互ノ親睦トシ目的トス
- 第四條 本會ハ右ノ目的達成ノ為ニ左ノ事業ヲ行フ
- イ. 民族ノ歴史文化文藝ニ関スル研究会ノ開催
  - ロ. 民族文藝ニヨル青年ノ教育ヲ目的トスル文藝会ノ開催
  - ハ. 夜間講習会ノ開催
  - ニ. 関係書籍、パンフレットノ刊行
  - ホ. 本會ト目的ヲ同ジクスル会トノ連絡
  - ヘ. 圖書館ノ設置
- 第五條 本會ノ会員ヲ正会員、準会員及名譽会員ノ三トス
- 正会員ハ本会組織ノ目的ヲ以テ開催シタル第一回会議ニ参加セルモノヲ以テス
- 準会員ハ、トルコ・タタール人ニシテ正会員二名ノ推選ニヨルモノトス、準会員ハ一年ノ后正会員トシテ認メラルルモ其ノ可否ハ委員会ノ決議ニ依ル
- 未成年ノ「トルコ・タタール」人ハ凡テ準会員トス
- 名譽会員ハ本会ノ目的ニ賛同シ且コレヲ援助スル日本人及ヒ他ノ外国人トス
- 第六條 本會ノ事務ハ總會ニヨリ選舉セラレタルハ委員ニヨリテ執行セラル委員ノ任期ハ一年トス
- 委員ハ正会員ノ中ヨリ選舉シソノ數ハ少ナクモ三名以上タルヘシ
- 第七條 委員ハ委員会ヲ組織ス ソノ員數ハ會議ノ決議ニヨル、但シ会長、書記、会計ハソノ最少限度トス
- 第八條 總會ハ正会員ノ中ヨリ会計検査員ヲ選舉ス、ソノ任期ハ一年トスソノ員數ハ三名ヲ最少限度トス
- 第九條 本會ノ会計ハ会費寄付金演藝会ノ収入ヨリ成ル
- 会費ハ正会員ハ毎月少クモ五十錢、準会員ハ少クモ二十五錢トス
- 第十條 本會ハ毎年一回總會ヲ開キ事業ノ總決算ノ報告ヲナシ新ニ委員並ニ会計検査員ヲ選舉ス
- 第十一條 本会ノ臨時會議ハ委員会ノ決議若クハ正会員三分ノ一以上ノ希望ニヨツテ開催ス
- 第十二條 本會ノ財産ハ日本國法律ニ準據シ本会ノ名ニ於テコレヲ管理ス
- 本会ハ会長之ヲ代表ス
- 第十三條 本會ヲ閉鎖スル場合ニハ本会ノ全財産ハ本会ト同目的ヲ以テ事業ヲナス他ノ日本國ノ都市ニ於ケル「イデル・ウラル・トルコ・タタール」人ノ会ニ譲渡セラルヘシ



戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 (2)

表 イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部の主な活動

日付	活動内容	出典
<b>昭和9 (1934) 年</b>		
3月30日	名古屋支部設立	『外事警察概況』3:154
5月9日	「日本イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会連合会」(於神戸)に、T. Hamidullah と Fayzrahman Maksudi が代表として、3人がゲストとして参加	Usmanova2007: 104 (MB <sup>*1</sup> 14: 1)
10月15日	タタール人にとっての“悲しみの日” <sup>*2</sup>	Usmanova2007: 104
11月30日	神戸モスクの定礎式に名古屋在住の旧露国人シラストルキセフが出席	JACAR, Ref. B04012533000, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係 第一卷分割1 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 87画像目
<b>昭和10 (1935) 年</b>		
1月19日	メルジャーニー <sup>*3</sup> 生誕125周年の会合	Usmanova2007: 104 (MB13: 6)
2月4~14日	イデル・ウラル・トルコ・タタール・文化協会極東大会に、代表としてテイメルバイ・ハミドリリン、ファイゼラフマン・マクシュトフが参加	JACAR, Ref. B04013197200, 民族問題関係雑件 / 第三卷2「トルコ, タタール」関係 (I-4-6-0-003), 外務省外交史料館, 15画像目
2月11日	「日本イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会連合会」開催1周年	Usmanova2007: 104 (MB18: 7)
3月9日	特別会合でモスクの建設を決定	Usmanova2007: 104
3月15日	クルバン (犠牲) 祭 <sup>*4</sup>	同上
3月22日	支部事務所に於いて定期総会 (男10名, 女10名参加)	『外事警察概況』1:168
4月	ユースフ・アクチュラ <sup>*5</sup> の追悼式	Usmanova2007: 104
4月15日	トゥカイ <sup>*6</sup> の祝祭	Usmanova2007: 104 (MB26: 11)
9月	新校舎に移転	Usmanova2007: 108
10月11日	神戸モスク開院祝賀会に、代表として7人が参加	『外事警察概況』1:166; JACAR, Ref. B04012533100, 本邦ニ於ケル宗教及布教関係雑件 / 回教関係 第一卷分割2 (I-2-1-0-006), 外務省外交史料館, 64画像目
<b>昭和11 (1936) 年</b>		
1月18日	モスク建設の許可を取得	Usmanova2007: 104 (MB63: 6)
3月4日	イスラム学校においてクルバン祭	『外事警察概況』2:189
4月1日	役員改選	同上
6月	ファフレディンの追悼式	Usmanova2007: 104 (MB30: 11)

名古屋学院大学論集

6月1日	マウリド (Meulid) <sup>*7</sup> 祭	同上 (MB31: 11)
8月25日	名古屋モスクの建築に着手	『外事警察概況』2: 189
4月19日	有志11名がイスラム学校に集合し、「イデル・ウラル・トルコ・タタル青年團」を結成	同上
9月4日	名古屋モスクの定礎式	Usmanova2007: 104 (MB63: 6)
10月	支部幹部会	同上
10月15日	タタル人にとっての“悲しみの日”	Usmanova2007: 104 (MB52: 13)
11月中旬	名古屋モスクが完成	<i>Nagoya Muslim Mosque: 12</i>
12月	断食明けの祝祭	<i>Nagoya Muslim Mosque: 6</i>
<b>昭和12 (1937) 年</b>		
1月22日	名古屋モスク落成式, 東区社会館において祝賀会	『名古屋新聞』16486; 『新愛知』16319; 『大阪朝日新聞』(市内版) 19846
1月23日	東区社会館において有志演出による劇(「夢」)を上演	同上
2月12日	極東大会2周年の会合	Usmanova2007: 106 (MB65: 7)
2月23日	イスハキーの著作活動40周年祝賀会	同上 (MB66: 3)
3月14日	ヒジュラ暦の新年を祝う	同上 (MB69: 6)
3月19日	クルバン祭	同上105-06 (MB67: 10)
3月25日	イスラーム開始の日	同上106
4月14日	ファフレディン <sup>**8</sup> とメルジャーニーの記念日を祝う	同上 (MB74: 9)
4月15日	トゥカイの祝祭	同上 (MB74: 9)
5月22日	マウリド祭	同上 (MB78: 10)
7月	会員より61円50銭の恤兵金を第三師団に献納	『外事警察概況』3: 153; Usmanova2007: 108-109 (MB87: 8)
7月29日	慰問袋40個を作成し, 第三師団に献納	『外事警察概況』3: 154
9月5日?	50円を警察に献納	Usmanova2007: 109 (MB92: 9)
9月13日	千人針四枚を作成し, 第三師団に献納	『外事警察概況』3: 154; 『新愛知』16552
9月18日	陸軍大臣より感謝状を受ける	『外事警察概況』3: 154
10月17日	総会開催, 役員の改選	同上
10月20日	包帯206本を千種警察署へ恤兵金として献納	同上: 『新愛知』16589; 『名古屋新聞』14956
<b>昭和13 (1938) 年</b>		
3月2日	名古屋警察署署長がイスラームの新年を祝うために祝祭に参加	Usmanova2007: 106 (MB116: 4)

戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相 (2)

3月28日	イスラム学校5周年	Usmanova2007: 108 (MB119: 54)
5月12日	東京回教団寺院落成式に名古屋から9人が参加	JACAR, Ref. B04012575600, 本邦寺院関係雑件 / 第一巻7, 回教寺院 (I-2-2-0-016), 外務省外交史料館, 8画像目。
5月22日, 6月2日	シャムグニが名古屋を訪問	Usmanova2007: 106 (MB128: 5)
10月17日	総会	Usmanova2007: 106 (MB142: 10)
<b>昭和14 (1939) 年</b>		
1月30日	クルバン祭	Usmanova2007: 106 (MB156: 10)
2月2日	青年団が劇を披露	同上 (MB156: 9)
2月20日	新年の前夜祭	同上 (MB158: 7)
4月1日	トゥカイの祝祭	同上 (MB166: 5)
10月15日	悲しみの日	同上 (MB189: 6)
	回教圏展覧会 (東京:11月7~19日, 大阪:11月28日~12月9日) に「トルコタタールの写真, 婦人服, 手袋, 髪飾, 頭包布, 卓子掛」など56点を出展	『回教圏展覧会』: 6
11月10日	クルバン祭	Usmanova2007: 106 (MB193: 11)
11月24~25日	回教徒視察団が名古屋訪問	Usmanova2007: (MB194: 8); 『回教圏展覧会』24, 98-99
<b>昭和15 (1940) 年</b>		
2月20日	イスラーム開始の日	Usmanova2007: 107 (MB203: 6)
2月22日	イスハキの誕生日	同上 (MB205: 5)
3月	ヒジュラ暦の新年を祝う	同上 (MB204: 6)
3月10日	総会	同上 (MB207: 5)
<b>昭和16 (1941) 年</b>		
4月8日	マホメット生誕祭 (マウリド祭)	『外事警察概況』7: 387
4月14日	ファフレディンに関する会合	Usmanova2007: 108 (MB213: 7)
4月15日	トゥカイの祝祭	同上 (MB213: 7)
4月18日	メルジャーニーの記念日	Usmanova2007: 108 (MB261: 7)
6月12日	新愛知新聞社講堂において, 大日本回教教会主催の講演会を開催	『外事警察概況』7: 387
8月28日~9月1日	奉天における極東イデル・ウラル・トルコ・タタール民族第二回大会に, セズガン・デウレソンスが出席	『外事警察概況』7: 386

昭和17（1942）年		
2月18日	シンガポール陥落を祝う	Usmanova2007: 107 (MB307: 11)
3月1日	満洲国 (Manchu-quo) 10周年を祝う	同上
4月28日	教会礼拝堂にてマホメット生誕祭（マウリド祭）を挙行	『外事警察概況』8：640
12月8日	大詔奉戴日（太平洋戦争開戦1周年）	Usmanova2007: 108 (MB335: 13)
昭和18（1943）年		
2月14日	タタール人の歴史に関する会合	Usmanova2007: 108 (MB340: 5)
昭和19（1944）年		
5月14日	委員会の改選	Usmanova2007: 109 (MB382: 8)
昭和20（1945）年		
5月14日	空襲によって名古屋モスクが焼失	小村1988, 299

註

- ※1：MB: *Milli Bayrak* (満洲の奉天において、アラビア文字表記のタタール語で刊行された週刊新聞。昭和10(1935)年11月1日に創刊され、昭和20年（1945）3月まで約440号が発刊された)
- ※2：1552年、モスクワ大公イヴァン4世は、ヴォルガ川中流域の要地カザンを征服し、カザン・ハーン国を滅ぼした（実際には10月2日）。この事件は、チュルク系諸民族の記憶に長くとどめられた。
- ※3：*Shihāb al-Dīn Marjānī* (Shihabetdin Märjani, 1818-89): タタール人のウラマー(イスラーム諸学を修めた知識人)、歴史家。主著として『カザンとブルガルとに関する情報の集成』(全2巻, 1885-1900年)がある。詳しくは、小松久男「メルジャーニー (*Shihāb al-Dīn Marjānī* : Shihabetdin Märjani)」小松久男ほか(編)『中央ユーラシアを知る事典』, 平凡社, 2005, 501頁を参照。
- ※4：ヒジュラ暦の第12月(ズー・アル=ヒッジャ月, 巡礼月)10日に行われる犠牲祭のこと。
- ※5：Yusuf Akçura (1876-1935): ロシアとオスマン帝国, トルコ共和国で活動したタタール人思想家。詳しくは、小松久男「アクチュラ (Yusuf Akçura)」小松久男ほか(編)『中央ユーラシアを知る事典』, 平凡社, 2005, 11頁を参照。
- ※6：Gabdulla Mökhämmätgarif uli Tukay (1886-1913): 現代タタール語・文学の創始者に数えられる詩人, 評論家。詳しくは、小松久男「トゥカイ (Gabdulla Mökhämmätgarif uli Tukay)」小松久男ほか(編)『中央ユーラシアを知る事典』, 平凡社, 2005, 374頁を参照。
- ※7：預言者ムハンマドの生誕祭。ヒジュラ暦の第3月(ラビーウ・アウワル月)12日に行われる。
- ※8：*Ridā al-Dīn Fakhr al-Dīn* (Rizaetdin Fakhretdin, 1859-1936): 帝政ロシア末期からソ連初期にヴォルガ・ウラル地方で活躍したウラマー, ジャーナリスト, 歴史家。詳しくは、小松久男「ファフレディン (*Ridā al-Dīn Fakhr al-Dīn* : Rizaetdin Fakhretdin)」小松久男ほか(編)『中央ユーラシアを知る事典』, 平凡社, 2005, 446-447頁を参照。